

石田 浩 編集

## 『教育とキャリア (格差の連鎖と若者)』

(勁草書房、2017年 286頁)

荒牧 草平



調査研究プロジェクトの成果本というと、同じデータを扱ってはいるものの、各章の内容は個々の著者の関心に任せているという例も多い。そうになると、多様なアプローチを知れる面白さはあるが、全体を通じた統一的な理解に達するのは難しくなる。同じテーマに対して異なる結果が示されて戸惑うことさえある(もちろん、それ自体は興味深くもあるが)。これに対し、本書では、最初に研究目的や分析枠組が提示され、終章には各章の知見をふまえた丁寧な考察も用意されている。あたかも単著のような構成をなす稀な書と言える。

本書を含む「格差の連鎖と若者」シリーズ(全3巻)は、ライフコース研究と格差・不平等に関する研究の架橋を目指した試みでもある(p.217)。個人の身体的・精神的・社会的変化を成長・発展過程として体系的に考察しようとするライフコース研究の視点と、個人の地位や属性による格差や不平等をマクロな社会構造や社会制度との関連から解明する視点を組合せ、互いの長所を生かし短所を補い合うという意欲的な設定である。

用いられるのは「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査」(JLPS: Japanese Life Course Panel Surveys)と呼ばれるパネル(追跡)調査プロジェクト(通称「東大社研パネル調査」)であり、2004年の高校卒業生を追跡した「高卒パネル」、2007年に20～34歳の若者を追跡した「若年パネル」、同じく35～40歳の壮年者を追跡した「壮年パネル」の3種類で構成されている。

この壮大なプロジェクトをまとめるにあたって、本書では「格差の連鎖・蓄積」という切り口を採用している。1時点の横断的調査では格差の断面しかわからないが、パネル調査なら、時間とともに格差が継続・拡大・消滅するメカニズムを解明できるため、対応策も考えやすくとされる(ただし、細心の注意を払って調査の設計と実施がなされているものの、パネル調査特有の回収率の問題を回避できているとは言えない点に注意が必要である)。

具体的な分析の枠組としては、生まれ落ちた社会的背景を出発点に、①教育達成、②学校から職業への移行、③初期職業キャリア、④家族形成という4つの移行過程およびそれぞれにおける⑤価値観や意識とその変化という5つの観点が設定され、これらに基づいて社会・経済的格差の生成・再生産過程が明らかにされる。本書(第1巻)は、このうち①から③までの変化に焦点をあてており、第二巻「結婚と若者」は④、第三巻「ライフデザインと希望」は⑤の観点からまとめられている。

以下、本書の構成を簡単に紹介しておこう。序章「格差の連鎖・蓄積と若者」では、「格差の連鎖・蓄積」概念の説明に続いて、社会的背景・教育・初職・現職という4つのライフステージを通じて生成・蓄積される格差について、ブラウとダンカンの地位達成モデル、階層地位ランクの連続性モデル、傾向スコアマッチングという3種類の方法から検討がなされている。分析の結果、出身と教育達成に強い関連があり、その格差が初職や

現職の達成においても維持される（拡大や縮小ではない）ことが示される。この前提に基づいて、各章ではライフステージに沿って様々な角度から詳細なプロセスが描かれる。

第Ⅰ部「学校から仕事への移行」にはプロセスの前半に関わる3つの章が含まれる。第1章「学校経由の就職活動と初職」では、学校経由の就職が、学校段階によって異なる「生徒の選抜」や「企業の選抜」を行いながら、条件の良くない初職（間断有・非正規・小企業）の回避という意味でセーフティネットの役割を果たしていること（不利な連鎖を断ち切る可能性）が示される。

第2章「教育拡大と学歴の効用の変容－日本型学歴インフレの進行」は、大学進学率の上昇にともなう「学歴インフレ」現象により大卒一般の価値が低下している一方で、選抜的な大学の価値が安定していること、しかしながら問題解決能力やコミュニケーション能力と学校歴は関連しないこと（むしろ中学時の成績が大きな影響を持つ＝初発の格差からの連鎖）を明らかにしたうえで、人的資本の増大に貢献しない学校歴がシグナルとして働く、シグナリング効果による学歴インフレーションが生じていると結論づけている。

第3章「新卒一括採用制度の日本的特徴とその帰結－大卒者の「入職の遅れ」は何をもたらすか？」は、新卒一括採用制度を取り入れている韓国との比較から、間断のない移行や強い入職年齢規範という特徴のため、日本では入職の遅れ自体が正規雇用や企業規模などの面で不利をもたらすことを指摘するとともに、日本の特徴が持ちうるメリットにも言及している。

続く第Ⅱ部「初期キャリアの格差」はプロセスの後半に関する3章で構成される。第4章「正規／非正規雇用の移動障壁と非正規雇用からの脱出可能性」では、5年間に地位の移動を経験する者は特に男性の場合少ないことを確認した上で、移動の詳細を検討し、非正規の中でも「パート・アルバイト」か「派遣・請負」かによって、また性別や年齢によって、正規への移動障壁が異なり、必要なサポートも多様であることが指摘される。

第5章「現代日本の若年層の貧困－その動態と階層・ライフイベントとの関連」では、世帯の貧困ではなく若者個人の低所得状態に着目し、学生や無職だけでなく非正規の場合も低所得になりやすいこと、また一度低所得状態に陥ると抜け出したいこと、それが結婚の困難や結婚後の世帯における低所得とも関連することなどが明らかにされる。

第6章「社会的孤立と無業の悪循環」は、「孤立無業者」(SNEP)に関する議論にも触れながら孤立と無業を区別する必要性を指摘した上で、「社会的孤立（仕事や勉強の相談相手がない）→無業→孤立→再就職の困難」といった悪循環（連鎖）について検証し、男性においてのみこうした悪循環の生じていることを明らかにする。

いずれも第一線で活躍する執筆陣が、丁寧な分析を行ってくれている。専門的な内容に偏らず、基礎的な情報も提示してくれているので、さっそく私の講義資料にも活用させて頂いた。この問題に関心を持つ多くの方にお勧めしたい。

（あらまき・そうへい／日本女子大学人間社会学部准教授）